

Levelt, W. J. M. (1989). *Speaking: from intention to articulation*. Cambridge: The MIT Press.

< Chapter 4: The Generation of Messages (pp. 107-123) >

4.0 Introduction

本章では preverbal message の構築について扱う。本章の構成は概ね以下の通りである。

- 4.1 preverbal message が構築されるまでの流れ
- 4.2 bookkeeping について
- 4.3 macroplanning について (情報の取捨選択の方法)
- 4.4 macroplanning について (情報を線上に並べる方法)
- 4.5 microplanning について

4.1 From Intention to Message

intention から preverbal message が生まれるまでには通常複数の段階がある。

intention: 女性に博物館までの道順を教えよう

macroplanning (=an ordered sequence of speech acts)

subgoal: 市役所への道順 + 博物館の詳細な位置

↳sub-subgoal: はじめに高速に乗って、2つ目の信号を右

ここで ~ のそれぞれは speech act として **microplanning** 段階へと進む

macroplanning: communicative intention を個々の speech acts のレベルまで落としこんでいく。

microplanning: macroplanning で取捨選択された内容に 3章で紹介された情報構造 (information structure) を与え、Formulator が受け入れられるようにする。

図でまとめると以下のようなになる。

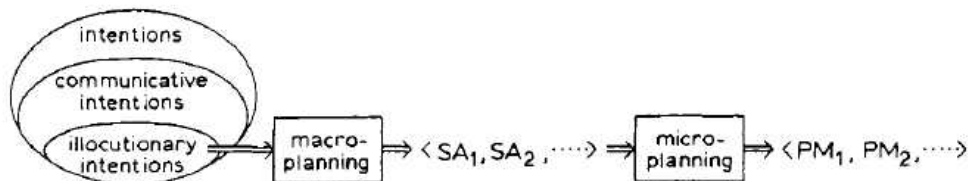


Figure 4.1

From intention to preverbal message.

4.2 Bookkeeping and Some of Its Consequences for Message Construction

話の流れを記録した談話についての情報を discourse record と言い、これを bookkeep(帳簿付け)することが会話をするには不可欠である。

4.2.1 The Type of Discourse

談話タイプには多くの種類があり、以下はその例である(中身の詳細は pp. 111-112 を参照)。適切な談話タイプの選択をすることも、正しい bookkeeping の 1 つである。

- informal everyday conversation
- examinations
- planning discourse
- radio talk
- narrations
- interviews
- route direction
- therapeutic discourse
- lectures
- debates
- spatial description

4.2.2 The Topic of Discourse

話者のある発話が discourse topic に関連があるとき、一貫性があるという。

discourse topic を変えるには以下のような方法がある(詳細は pp. 112-113 を参照)。

- true interruption : “*The next issue I want to address is ...*” 明確にトピック変更
 - digression : “*That reminds me of ...*” 遠慮がちに脱線
 - flashback : “*Whoops, I forgot to tell you that ...*” 会話の始めで多く、通常元の話題へ戻る
- discourse topic には goals と subgoals から成る階層(hierarchy)がある。

4.2.3 The Content of Discourse: Discourse Models and Presuppositions

話者は discourse models を構築しながら指示対象に再び言及したりする。discourse models とは、話者間で共有されていると思われる知識、のことである。a と the の使い分けもその例。

discourse models の具体例が p. 116 の Figure 4.2 にある、Marcia と Seth のイタリア旅行についてのものである。

common ground : 今の会話とは無関係に共有されていると(話者自身の判断で)思われること。

own contribution : 談話中に話者自身が伝えたこと

interlocutor's contribution : 談話中に相手から伝えられたこと

information to be conveyed : これから談話で伝えようとしていること

} この2つは表裏一体の関係

この discourse model を基礎として談話を続ける際、presupposition が大切になる。

- existential presupposition : ある物体の「存在」を前提とすること “*The **FERRY** is convenient.*”
- factive presupposition : ある「事実」を前提とすること

“*When did you stop taking your vacations in Italy?*”

- backward suppletion : 相手の発話内容から相手が勝手に前提としていることを読みとること

“*Ah, he thinks I'm not going to Italy anymore.*”

discourse model 全体に継続的に注意を払うことは難しい。話者は長期記憶内に discourse model を貯蓄し、必要に応じてその断片に注意を向けていく。この断片を focus と呼ぶ。

4.2.4 The Focus

話者が注意を向けられる情報の範囲(focus)は限られている(e.g. Miller's magical number 7 ± 2 ; Broadbent's three-slot register, etc...).

focus の中でも最も重要な内容を特に focal center という。これは話し手と聞き手で異なるのが原則である(speaker's focal center と listener's focal center)。話し手は相手の直前の発話を受けて、自分の発話でどこに focal center を持ってくるかを定める。

通常、topic と focal center は一致しないが(*The island can be reached by an old ferryboat.*)、次のような例では一致することもある(*The pope didn't say much in five languages.*)。

4.2.5 What Was Literally Said

聞き手は通常内容に注意を払う。しかし、表面上の言葉づかいも心のどこかに留めている(literal recall)という実験的証拠がある(e.g. Kintsch & Bates, 1977; Keenan, MacWhinney & Mayhew, 1977; Bates, Masling & Kintsch, 1978, etc. 詳細は p. 121 を参照)。

Levelt & Kelter (1982)では、以下の4種類の文章を尋ねた場合に、.答えに At がつくかつかないかを検証した。結果、短文の(1)と(2)では質問文の形に一致する確率が高く(61%)、より長い(3)と(4)では質問文の形と一致する確率が低かった(47%)。つまり文章が長くなると、特別な注意が向けられない限りは、literal recall は文の最後のほうの表現だけに限定される傾向にある。

- (1) What time do you close?
- (2) At what time do you close?
- (3) What time do you close, since I will have to come downtown especially for this, you know?
- (4) At what time do you close, since I will have to come downtown especially for this, you know?

<感想等>

発話内容を計画する macroplanning と、それに文法形式をあてはめていく formulator 段階の間にある microplanning の役割がまだはっきり見えてこない。また discourse model という言葉が登場したが、situation model との概念的な違いは、後者がパッセージ全体の内容に関する聞き手の心的表象であるのに対し、前者はさらに分化された各トピックに関する聞き手の心的表象であるという点であるようだ。